

奥さんには「内職しすぎるなよ」、「お前たちが待っているから生きていける」と言うようなことがノートにつづられていました。

奥さんの話では、そんな彼の幸せは、やはり3ヶ月の漁の合間のわずか3日間の休日。

そのときはいつもニコニコしながら家族と買い物や食事に行った。と話していました。

そんな彼がなぜ家族との時間を手放してまで漁へ行ったのか？その答えはノートにありました。

小平さんは、中学を卒業した後に漁師になったために学生生活が短かったという経緯があり、子供達を好きな学校へ行かせたいという思いがあったようです。家族を楽にさせたいから漁へ出る。食べさせるためには漁しかない。出来るだけ貯えを残したい。そういう思いで漁へ向かっていたのです。

その命のノートを読み進めていると漁獲量が少ない日もあります。

その時には、このようなことがつづられていました。

「どうしても、舟をいいところへ持っていけない」

「頭が痛い、胸が痛い」

「不漁が続けば、お前たちへ火の粉がかかる。大漁にしなければ！」

「毎日が地獄のようである」

「そう思うと頭が変になりそうで、あ～早く帰りたい！、お父さんを助けてくれ！」

本当は最後の時間を家族と過ごしたい、だけど家族のため漁にでて自分が亡くなったあとに苦勞をしてほしくない。家族に幸せで過ごしてほしいという思いで、本当の気持ちを家族に語らずに漁へ出ていました。だけどせめてノートの中で構わないので家族が側にいるように過ごしたかった。

小平さんは42歳の若さで亡くなりました。

現在、息子は映画を作る学校を出て、この父親のエピソードを題材にした映画を作るまで成長しました。

娘さんも短大を卒業することができました。

家族は、父親のことを本当に尊敬していると涙ながらに語っていました。



この話が終わった後に、「あなたは誰に何を伝えて逝きますか？」という質問がありました。

女優の岡江久美子さんは、「私は何も残さない、私の父は突然死んで何も残さなかった。そんな死に方だったけど、死んでから父の兄弟からあなたの父は、あ～見えても本当はこういう父だったのよと聞かされた。私も同じように私の兄弟から私の子供たちにそのような話が伝わるだけで十分」と言っていました。

また、鈴木奈々さんは、「ノートを書こうと思った。文字を残したい。今まですごく幸せだったよ。これから先も旦那に幸せになってほしい！再婚してもかまわないから！」ということを書きたいと話していました。中居さんは「奥さん子供がいらないから、今だったら何も残すものはない。」と話していました。

「あなたは死に際に何を残しますか？」

と考えると自分の死はどういったものなのか？どういったものであってほしいのか？と考えると思います。そう！できれば苦しまずに、楽な死に方をしたい。幸せな死に方をしたい。と思いますよね。

その方法としてあるのは、老死です。

パッと死ねる心筋梗塞もありますが、パッと死ねなかった時は大変な生活が待っています。

パッと死ぬというのは狙うことが難しいものです。

老死の定義は、病気にかからず体の機能が衰えて死に至ることです。